芸振

大分県芸術文化振興会議会報

——もくじ——

シンポジウムおおいたの文化創造……1
特集 ―美しい大分― 日本画・洋画……2
特集―美しい大分―彫刻・工芸・デザイン 3
特集―美しい大分―書道・写真 ……4
提言、公共施設に制作や練習のできる場所を
会員のこえ、芸振に託す夢 ……5
県内の文化施設、佐伯文化会館・芸術文化基金 6
市町村文化活動の現状、竹田市文化連盟 ……7
大分県演劇のあゆみ(2)・文化ニュース……8

発行人・挾間正年　　編集人・原尻　実

No.53　56・12

シンポジウム

おおいたの文化創造

―ふるさとに若い力を―

仲町謙吉（光風会）

「おおいたの文化創造」をテーマにしたシンポジウムが、11月30日、大分市の県立芸術会館で開かれた。会場には県内各地の文化活動グループのメンバーや、大分市内各高校生ら約千人が詰めかけ、講演やシンポジウムに耳を傾けた。

冒頭「カイコだけが絹を吐く」と題して扇谷正造氏が記念講演。荻町田代神楽のアトラクションを挟んで、草柳大蔵氏が基調講演。①風土と文化、②「なる」文化から「する」文化へ、③文化伝承と開顕―について科学的、歴史的知識を駆使しながら自論を展開、続いて、県内でユニークな文化活動を続けている「新邪馬台国建設公団」（宇佐）、「尾平音楽祭実行委員会」（緒方町）、「田代神社青年神楽研究会」（荻町）、「大山町世界を知ろう会」（大山町）の四代表がそれぞれの活動を紹介しながら夢多き提言。さらに扇谷、草柳両氏と平松知事が助言者として加わり〝ふるさとの文化〟について公開討論が行われ、文化創造へのエネルギーが会場いっぱいにみなぎった。

特集 ―美しい大分― 美術をとおして……

車窓にみる絵になる風景

<日本画> 小 野 一 郎

「どちらから？」と問われて、「大分です」と答えた私は、車窓にひろがる近江路に、ふるさとの山河をだぶらせていた。壮大な久住高原、透明な海をもつ県南の入江、花の影にほほえむ野仏、ユーモラスな石の仁王に出会う里、くにさき……。

耶馬渓を見たい……といって別府へやって来た美校時代の先輩に、「中津で降りればよかったんですよ」といいながら、別府―湯布院―森―中津というコースがひらめく。雲一つない秋の日、城島を通って湯布院へ。昼食の豆腐に添えられた紅葉の一片が心にくく、豆腐好きの先輩をうならせた。「このままで絵になるなー」と窓に額をおしつけて、見えなくなるまで由布を仰いでいた彼のことばと姿が印象的だった。森から裏耶馬をまわる。何度も車をとめては見入る先輩、紅葉には少しおそかったが。もううす暗くなった洞門で、水を見なければ……と川岸へ走って行った先輩。しばらくしてある美術誌に耶馬渓と題した先輩の絵を見た時はとてもうれしかった。

トンネルをぬけて町へ入る。竹田(ちくでん)を育んだ風土がそこに息づいている竹田(たけた)。春まだ浅い日、雪舟の漂泊の足跡を訪ねたいというS氏を案内して、上野丘、沈堕の滝、英彦山とまわる。滝を見すえて絵筆をとる画僧の後姿を想い、あらためて美しいふるさとを見た。

秘境が一度そのヴェールを脱ぐと、俗化の波をもろに被る。美しい大分を誇りとする時、環境保全と開発の問題はさけて通れないだろう。国道沿いの空地に茂る雑草散乱する空カン。今要るものは、きめ細い行政と、ここに住む私達の郷土愛。

ふるさとはいつまでも美しくあってほしい。

（県立芸術短期大学教授）

県美展と大分

<洋画> 脇 坂 秀 樹

県展のあり方を検討しよう。という動議が一昨年来、日洋彫工部運営委員会の都度、継続提案されている。その端緒となった現行陳列方式（アルファベット順）については昨年春の定期総会で点検を終え、陳列委員会の裁量を大幅に加味し、展覧会効果を改善することで一応の決着をみた。

しかし、県展ないし県美協について主体的・能動的に考えれば点検すべき事項が多いにちがいない。昭和21年創立以来、毎回、反省改善を重ねてきた県展ではあるが未来を展望するとき、大きな視点での総合点検を要することは当然である。しかし、誰が何時手がけるかということになると、なかなか大へんなことのようにも思われるが、その時が今である。ということになるのかもしれない。全員が心を一つにして取り組める状況がやっと訪れている感を肌に感ずるからである。会員意識が高揚し、その代表である運営委員諸氏の連帯感が強く、内省的で、建設的姿勢が、今ほどうかがわれたことはないように思われる。大分に生まれ、大分に育ち、大分で学んだ中堅、新進作家群の自覚と意識が今や横溢している感が強い。事務局としても委員諸氏の要望に添えるよう、過去、現在、未来にわたってより的確に点検整備しうる資料、「県展のあり方検討資料」を準備中である。――組織運営略史、――応募陳列状況、――春秋別会員出品状況、――巡回展略史、――支部と会員分布状況、――中央展との関連、――外来審査員記録、――候補者名鑑等の資料は既に提供しうる段階に近づいている。それらの資料整備の過程を通して、特に注目されることは、県下洋画壇の質的向上と底辺の拡大に、中央展の出品者グループ活動と美協の支部活動が本部運営の過不足面を補い、美協の両輪として確固たる位置を占めているということである。

大分の風土と大分県展で育った作家群が今や外に向っては中央展で思い思いに存分にはばたき、県内にあって後進の育成に着実な努力を払っている姿が浮き彫りにされて見られるのである。ちなみに中央展関係者は洋画部会員248名中の過半数130名前後と推計され、会友以上（無鑑査クラス）は約60名にのぼるのである。

美しき大分の象徴として県美協ないし県美展は今会員相互の意志によって自主的に点検をすすめようとしているのである。

（県美協事務局次長・東光会委員）

特集 ―美しい大分― 美術をとおして……

彫刻の香りが失いかけた人の温もりを……

<彫刻> 平 山 史 郎

大分は仏の里である。特に石造彫刻は至るところに散在している。私などは機会を得ずに極僅かばかりを知るのみで本当は語る資格などない。それで出逢いを重ねて行きたいと願っている。

人知れず埋れ続けて来て、それが葉蔭から顔覗かせた羅漢さんを発見したという先輩たちの遠い話などを聞くにつけ、緑の山野にも人間と同じ様に時の流れや息吹きが感じられる。

草深い山里のあちこちにさり気なく置かれ、あるいは崖などの岩板に刻み込まれた石仏たちの数に比べれば、今日の人たちに成るものは余りにも少な過ぎると思う。

規格化された街路樹に個別的な表情を見ることはできない。個性のない切り詰められた樹木が垣根になったりしているのが途切れているあたりにも彫刻が欲しい。

樹木の持つ自然<四季>と彫刻の香りが創り出す潤いとで、失いかけた人の温もりを取り戻したい。

最近になって彫刻を志す若者たちが大分にも増えつつある。彼等の溢れんばかりのエネルギーを豊かで活気ある街づくりに役立つように仕組みたい。こうした思いや心の内側にこそ「美しい大分」は見えてくるのである。

（大分県立芸術短期大学助教授）

残したい大分の伝統工芸

<工芸> 楢 原 長 甫

山あくまで青く、川の流れは清く、海岸線は起伏美しく、こんな大分県に居住する民衆は心豊かにその生活には自づと周囲の風物に気を配ったであろう、日常の生活には欠かせない工芸品が生まれ、しかも高度なものであったと思われる。その遺産が現在に引継がれ今日種々の分野で発展している。その伝統ある工芸を吾々は何としても守って行かねばならない。所が太平洋戦争で資材も人材も其の殆どを失い一時は茫然自失の有様だったが平和の回復と共に漸時復活し今日に至っているものの、伝統工芸の技術を継承している者は数少ない。又技術を伝承する為の工具資材も日々窮乏し、技術者個々では手の施しようもなく今のうち国、県、市など公共の力で復活を考えなければ折角の伝統工芸も姿を消す運命ではないだろうか。日田の漆器などその顕著なものと言えよう。又竹田の手漉和紙も保護する要があるだろう。県下各地で染や織の伝統技術を細々と守っている人達も大切にしてあげたいと思う。

只すくいは別府の竹工芸と民陶小鹿田窯が盛んである事、双方共後継者の養成には協同組が主体となって努力している事は特筆すべきだろう。かくして伝統工芸を基盤に生活工芸が発展しつつ美しい大分も永遠となろう。

（日本工芸会正会員・県美協名誉会員）

″ふるさとの顔″ おおいたのデザイン

<デザイン> 波 多 野 義 孝

つい先頃、トキハで「ふるさとの特産品展」が催されたが、会場には大分県を代表する各種特産品がずらり勢ぞろいして壮観であった。職業柄、中味はともかく外装のパッケージ・包装紙・商品ガイドのリーフレットなどの出来ばえの方が気になり、一品一品興味深く眺めていったが、率直なところドキンとするデザインに、ついぞご対面できなかった。

グラフィックデザインは、最終的には印刷というメディアを通して製品化され市場に出てゆくが、今日ではそのデザイン制作プロセスもより高密度の思考を要求されもはや一人業の時代は過去のものとなっている。

ことパッケージデザイン一つをとりあげてみても、恵まれた風土に育くまれた″ふるさとの味″をより広角にアプローチするためには、郷土を最も理解したデザイナー・コピーライター・フォトグラファー・イラストレーターによる共同作業が望ましいことは言うまでもない。

早くあの街角に、この店頭に、見逃えるように磨きのかかった″ふるさとの顔″がのぞく日を連想しながら、グラフィックデザイナーとして地道に歩を進めたい。

（日本グラフィックデザイナー協会会員
大分県宣伝美術会会長）

特集 ―美しい大分― 美術をとおして……

書道界の一大成長期を迎えた大分

<書道> 西 村 春 斎

人口123万3,551名。その殆どが職場や学校で、或いは家庭で字を書いている。今年の県美展で出品を志した者は1,200人だから、1,000人に1人は作品を手掛けたことになる。更に入選が600だから、それは2,000人に1人という偉大なる記録であり、立派な人生の一頁だ。ましてや特選ともなると、これは県民の代表である。特選は20で、6万人に1人しか選ばれないのだから楽しい。

書道の伝統は県下でも古い歴史が残っているが、展覧会に出品する書作活動はここ数年来飛躍的に活発となりとりわけ中央展への進出が顕著になってきたことや、平均年令層の若返りと、地域的な片寄りがなくなってきたことなど、東洋の芸術は磐石の布石で郷土を飾っているのである。また、幸によき指導者に恵まれているという大切な要因は隠せないまでも、指導者自ら中央書壇の第一線に立ち、国際的にも訪中、訪欧、訪米と実に積極的に参加して作品を紹介し、交歓会を催しては研鑽に余念のない姿あればこそ、いま書道界は一大成長期にあるといえよう。

大分県美展では、書道は全国でも珍しく6部門制が規定されてそれぞれ発展しつつある。即ち、中国伝来の漢字部門、日本特有のかな部門、近代感覚と可読性を芸術的に追求した近代詩文書部門、一字か二字での表現で芸術性を問う少字数部門、篆刻に刻字、前衛書である。

いつか県庁前の目抜き通り1キロを、書道芸術で飾って見たいものだ。

（県美協事務局次長・県書美振事務局長）

失いたくない美しい映像

<写真> 三重野 元

大分の美しい自然は写真のレンズをとおしても、その良さをみごとに表現することができます。

大分県観光カレンダーとなった「おおいた春夏秋冬―酣」は二科会会員大崎聡明氏が四季おりおりの自然美を撮影したものの中から12枚を選んだもので、そのほとんどが風景の一部分を、エッセンスだけを抽出したものですが、年毎に美の真髄を追究できる純粋で人の心に迫る風景の範囲が次第に狭められているのです。

広い風景となると異質なものが混入して、どうしても不協和音を発してしまいます。

最近の新聞報道で、新大分送電線が耶馬渓から九重を横切って高い鉄塔が建てられそうだとのことですが、そうなれば県下の風景写真家にとっても観光大分にとっても大きなマイナスとなるでしょう。

四季を問わずこの地区を対象に多くのカメラマン達が集中していますが、ここには人工を加えない、おおらかな美の世界があるからです。

海岸や海にしても大きく変わってきています。日豊海岸地区では削り取られた半島、コンクリートの消波堤などがカメラを拒否しています。

伝統文化についても同じことがいえます。臼杵石仏、富貴寺周辺の無秩序な荒廃ぶりは目にあまるものがありますし、旧藩時代の面影を例にとっても、年々刻々その純粋さを失ってきています。

道路拡張によって商店街の発展を……という杵築市、道路が広くなれば通過車輌は増加するでしょうが、それがそのまま発展につながるでしょうか。全国でも有数のまとまった城下町の形態を残す杵築は次第に消滅するでしょう。この町に××銀座というみにくい不均衡な姿を持ち込んではならないのです。私達が過去、現在撮影しているフイルムの映像だけが良き時代の杵築であったと回想するだけでよいものでしょうか。

近代化という美名のもとで安易な変革は破壊へとつながります。

〃美しい大分、うるわしい大分〃を掛声だけに終わらせないよう、純粋で誇り高い美とは何かを真剣に考えてゆきたいものです。

（県美協事務局次長）

提言

公共施設に制作や、練習のできる場所を

芸振理事
岩男　順

大分県美術協会日洋彫工部は、県内在住作家のまとまった団体としての発表機関として、最大のものである。

その歴史も古く、会員も絵画部 301人、彫刻部15人、工芸部20人となっている。ここ3年間を振り返ってみると、出品者も年々ふえている。56年秋季県美展では、55年秋季展よりも、絵画部32点増、彫刻部1点増、工芸部18点増となっている。この中で、彫刻部出品者数が、ほとんど変わっていない。これはいかなる理由によるものであろうか。

筆者がふれた範囲でも、彫刻的才能の豊かな人は、今までに何人かいた。その人達が彫刻を専攻すれば、中央で活躍する人々の中に、加わることが約束されるものと思われた。しかしながら、その人々のほとんどは、彫刻をあきらめてしまった。わずかにその中から数人が、彫刻を専攻できる大学、又は、大学院に進んだ。その中で現在も制作を続けているのは、アトリエを持つ極めて少数の人々である。彫刻をするには、回転器と多量の塑土と、これらの重量100キログラム以上を支え得る床が必要となる。又、これの制作や型取りには、かなりの空間を必要とする。

これに引き替え、絵画は100号ていどならば、普通の日本間でも制作することができる。従って、日曜画家を含めて絵画人口は非常に多い。しかしながら彫刻をしたくても、前記の条件が満たされなければ、することができない。まことに残念なことといわなければならない。

この実態の上に立ち、私は提案したい。それは芸術振興の一環として、彫刻を始め自由に制作したり、演劇などの練習をすることができる施設を設けてもらいたい、ということである。それを公共施設として作り、開放してもらいたい。

芸術振興は印刷物や掛け声だけではできない。演劇も音楽も含めて、練習や制作に必要な場所がなくて、何ができようか。自由に制作させてくれる工房があり、指導者もそこであっせんしてもらえる。このような公共施設を是非作ってもらいたいものである。体育のためには、体育館があり、競技場があるが、芸術のための練習場といえるものは、作られていない。芸術会館があるが、この意味では、役に立たない。

使用料の極めてやすい、しかも制作、練習のための施設が必要なのである。体育館に対応する芸術館の設立を切に要望するものである。

（県美協副会長）

会員のこえ

芸振に託す夢

前芸振事務局次長
徳丸欽也

県議会に地方振興議員懇談会。略して「地方懇」という議員さんで作った協議会組織の団体がある。

一口で言えば、政治・経済・教育等何かにつけて大分市に偏重することのないよう〃もっと地方にも力を入れろ〃という格差是正を促すための団体と聞いている。

県下の市町村文化関係者、団体にも正直なところ、このような「声」はないだろうか。芸術や文化の世界に格差という言葉は適切でないかも知れないが、素朴な意味で、もしあるとするならば、是正にむけての取り組みを芸振に期待したいのである。指導者の派遣要請、活動家の国内外研修、各種団体の育成等、どれをとってみても大切なものばかりである。これからますます多様で多くの文化的欲求に即応する芸振体制が望まれようとしている時最大の関心事は、やはり「芸術文化基金」の行方であろう。

昭和五十六年度の募金状況も、芸振団体、会員の納入状況が悪いときく。初年度のような意気込みが感じられないのは何故だろう。

受益側としての権利を放棄するようなものである。今は唯、基金の芸振でよいではないか。計画どおりの達成を願うのみである。

計画では、昭和六十年度から基金運用益（利息）による事業が始まるという。皆んなで英知を出し合い、中央も地方もない県下全域に芸術文化の一村一品運動ともいえる個性的で自主的な団体や事業の育成、援助をお願いしたい。芸術文化基金とは、そのような夢を与える「青い鳥」ではなかろうか。芸振の昭和元年はもう間近である。

（教職員第二課課長補佐）

県内の文化施設

(2) 佐伯文化会館

所在地　〒876　佐伯市三の丸

1　運営の基本方針

(1)　借館業務は、会議、学習、展示、即売の用に提供している。また、結婚式の簡素化運動に基づき、その指導と運営に当たっている。

(2)　地方文化の育成に努力している。

2　施設の概要

(1)　一階には、会議、学習、展示、即売等に供するため、洋式会議室が二室、和式会議室が一室、結婚式場とその控室が三室あり、また、学習、展示、即売、小発表会、結婚式披露宴に供する、三百人収容の中ホールがある。

(2)　二階には、約千三百人収容の個定席と、音響、照明の各器具を完備した大ホールがある。演劇、音楽会、講演会、大会の場として提供している。

3　事業の概要

(1)　佐伯文化会館自主事業は、国内外からすぐれた芸術団体を招き、低料金で観賞に供している。文化庁移動芸術祭を毎年、そして、クラシック音楽の演奏会も毎年メイン事業として実施している。ドイツのゲバントハウス四重奏団、パリ八重奏団の演奏会は、県外からも愛好者を集め好評だった。また、親子を対象とした「子ども劇場」も年3回ないし4回実施している。すぐれた児童文化を親子が共に楽しみ、親子の絆を強めることに役立っている。

(2)　学習活動の育成では、盆栽、日本古典、親子読書美術、書道などの教室を開設している。また特徴的なのは、市民合唱団、少年少女合唱団、吹奏楽団、バロック音楽の教室でアマチュアの演奏団体を育成し、定期演奏会を続けていることであろう。

(3)　佐伯文化振興会は、市内の各社中、各文化団体の40団体を組織し、その運営に当たっている。年に一度10月から12月にかけて佐伯市芸術祭を開催し、展示部門、演技部門に分れて盛大に行事をもっている。中でも、約3年毎に実施する大ホールでのバラエティショーは、郷土の文学、芸能、風物を素材にしてすべての団体の出演、参加により上演される。今年は「佐伯ファンタジー」を好評裏に公演した。

(4)　その他、県美展巡回展、佐伯出身画家の美術展等にも取り組んでいる。

4　利用案内

(1)　利用時間　9.00～22.00

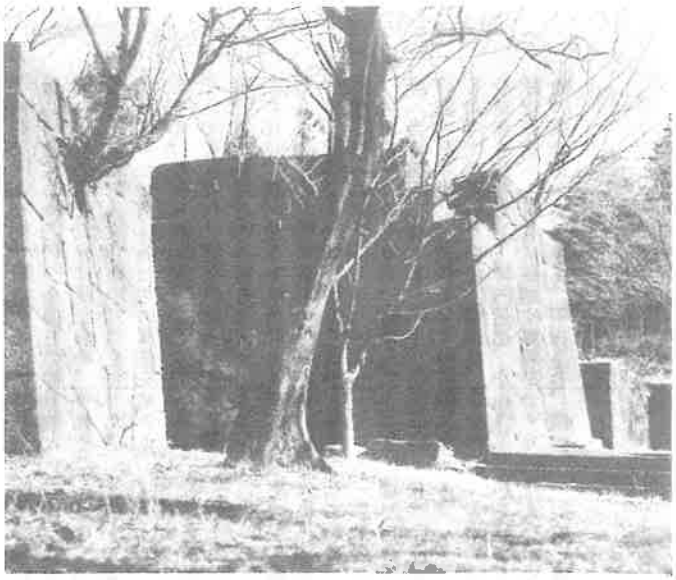
(2)　休館日　第1月曜日と第3日曜日及び年末年始。

（文化会館係長・佐伯文化振興会事務局　菅淳一）

芸術文化基金

十一月三日文化の日、昨年に引き続き大分県芸術文化基金の街頭募金活動が、大分市の繁華街で行なわれ、町行く人たちにチラシを配り協力を呼びかけた。芸振理事（各部門代表）を中心に二〇名の人たちがタスキをかけ募金箱を持って「お願いします」…。

わずか一時間程度の一般の人たちへの啓蒙活動ではあったが、募金箱に足を止め趣意に賛同された人々の善意は、貴重なものであった。



市町村文化活動の現状

地味ではあるが市民に密着した活動を展開

竹田市文化連盟副会長　阿部隆好

竹田市文化連盟

竹田市文化連盟は、終戦後の混乱期流行したヤクザ踊りや自棄的行動の風潮に、そって、岡藩文化に培われて育っていった、茶華道、文芸、美術、音曲、芸能の各部門の先達、田能村竹田、滝廉太郎、朝倉文夫、山本東次郎三角寛、広瀬武夫等に思いを馳せて憂慮した有志団体が各部門の代表者と協議して、文化団体の協議体を組織し文化連盟として発足した。

参加部門種別は、茶道、華道、舞踊、民踊、民謡、謡曲、詩吟、合唱、マンドリン、軽音楽、琴、三絃、漢詞短歌、書道、絵画、写真、工芸、史談会と多彩であります。竹田春のまつりの創始推進母体として、更に滝廉太郎記念音楽祭の推進定着に活躍し、以後毎年恒例の文化祭公演と展示会を続けています。41年国体の際には竹田市の歌、竹田よっちょくれのレコード作製と踊りの普及に尽力、その後は竹田市文化会館建設の為に推進活動を続け、文化の殿堂の完成をみるに至りました。

各部門活動については、文芸部門は季刊誌竹田を56年より創刊し二回目を発刊し、史談会は郷土を知る講座を開設しました。茶道会は市行事に後援し、春、ふるさと祭り、観月祭、文化祭に、野点席を設ける等、協力し今では竹田市のなくてはならない一つの名物となっています。舞踊部会では敬老会の行事に協力し高令者を慰安するほか、祭典等に出演し竹田の街を彩っています。琴、三絃は夏の夜を馬追の姿で流し、城下町ならではの風物詩と観光客は勿論市民に安らぎを与えています。謡曲部門では、広瀬神社で薪能会を催し絶賛を浴び、市民の集り、祝宴、結婚式には必ず祝儀三番と謡があがるのが例となる程に定着しています。吟詠では全国大会で光霊流で出演し、日本一を獲得し、吟詠ブームを起こしています。地味な文化活動ではありますが、市民の情操を培い、明日の発展を期待しつつ精進している現状であります。

豆知識

アブストラクト（抽象主義）
一般に抽象美術をいう。外界の写実的再現を一掃し、純粋な形と色だけの働きによって美的情感を喚起しようとする絵画や彫刻。

エッチング（銅版画）
銅板を用いた版の絵をいう。ふつうは凹版（凹部のインクが紙に写る）であり、技法として直接版に彫りこむ方法と、腐蝕薬剤を用いる方法とがある。

グアッシュ
水彩絵具の一種。すべて不透明色。顔料の粒子が細かく重厚で鮮麗な発色が得られる。西洋の水彩画には多くみられる。

グラフィック・デザイン
印刷を通して制作されるデザイン。現代の印刷技術の発達とともに飛躍的に開発された分野。広告、宣伝と商業デザインの名称で社会的に定着する。

ポップアート
ポピュラーアートの略。50年代の末から、ロンドン、ニューヨークを中心にあらわれ、その後国際的に波及した新しい芸術傾向をいう。
日常的で大衆的な映像や実物を単純な技法で表わすところに、美感の逆説としての反芸術的特徴がある。

れんさい

大分県演劇のあゆみ（その2）

中沢　とおる

劇作家の飯沢匡氏は、NHKシェイクスピア劇場の解説で、「日本の演劇は権力からの抑圧史でヨーロッパ演劇が羨ましい」と語っている（本年十月）。

庶民から生まれた田楽は、能・狂言となって一つの完成をみるが、同時にそれは将軍、大名の観賞物となり、庶民の手から切断された。その後、出雲の阿国によって始められた阿国歌舞伎は、河原乞食とよばれながらも民衆の共感をえてひろがっていく。そのエネルギーは、江戸時代、浮世絵とともに世界に誇る歌舞伎芸術を花開かせた。明治以後、歌舞伎は新しい時代の権力者や金持ちの観賞物となり、その様式だけに美を求め、それを生みだした町人文化の心意気を失った。座民はふたたび自分たちの演劇をもとうとする。新派・新国劇などの大衆演劇はそうして生まれ、水谷八重子、伊志井寛辰巳柳太郎などの名優をうんだ。しかしここには、興行資本を抜きにしては成立しえないという商業演劇の鉄則が動いている。演劇芸術の背骨をなす戯曲と演出は遠ざけられた。

大正末年、ヨーロッパに学んだ土方与志（当時伯爵）は、ヨーロッパ近代演劇の舞台に感動し、芸術としての演劇創造を日本で確立したいと、帰国後、自分の全財産を投げだし、坪内逍遥、小山内薫秋田雨雀らとともに築地小劇場をつくった。新劇の出発である。千田是也、滝沢修、宇野重吉、東野英治郎、芥川比呂志山本安英、東山千栄子、杉村春子らの名優はここでうまれ、戦後も、仲代達矢、米倉斉加年、栗原小巻、太地喜和子などの名優をうんだ。人間の自由と民主的権利を要求する新劇は、戦争に反対し、大弾圧をうけた。終戦の時、土方与志は仙台刑務所から出所し、名優丸山定夫は広島原爆の犠牲になった。多くの新劇人はファシズムから受けた深い傷をかかえながら、戦後の民主日本建設という大理想と向かいあったのである。

その流れの中に山本宗生氏（現、佐伯市社会教育課長）がいた。氏は新協劇団（代表、薄田研二）演出部に籍をもち、戦後初の新劇合同公演「桜の園」に参加しながら、歴史の大転換の中にゆれる日本演劇史の虚と実を自分の目でみている。演劇芸術を真に理解できるこの人の存在は重い。

昭和十六年に知事官舎で部課長夫人らを相手に始めた朗読会がある。二十一年春に「湖の女」（八木柊一郎作）を上演している。

故人になった安達昇、佐藤太宥、小松葉州邦各氏らの他に、佐藤文生氏、NHK、合同新聞社の関係者らが参加している。

本格的な戦後の演劇運動は、そのあとから始まるのである。戦前、新劇の影響は大分になかったと考えてよい。

（県民演劇制作委員長・芸振理事）

文化ニュース

◆県美展巡回展

12月14日～16日　宇佐農業高校体育館
12月17日～19日　津久見市民会館
12月23日～25日　佐伯文化会館

◆大分芸術会館

1月24日　宝生流演能会

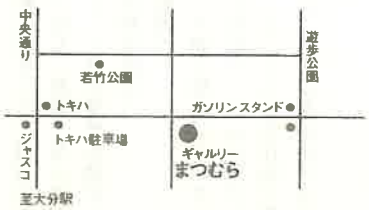
◆本年度の県芸術祭賞

◎芸術祭賞　萬謡会（開幕行事、ふるさとのうた）
　　県日舞連盟（閉幕行事、古曲に入りて）
◎功労賞　加藤正人・日田市文化連絡会・中津文化協会・鶴見町教育委員会
◎新人賞　青木由紀年（彫刻）
　　池田　萬穂（三味線）
◎特別感謝状　榎本滋民・豊竹咲大夫・鶴澤清治
◎感謝状　県俳句連盟ほか、共催、参加行事

ギャルリー まつむら

大分市府内町1丁目6-5（トキハ通り）
TEL 0975-37-8472

絵の好きな方々が気楽に話しあえる画廊をつくりました。お気軽にお越し下さい。又個展会場にご利用下さい。



編集後記

あわただしい日常性と、人間を見失う空間がひしめき合う中で、81年も終わりを迎えようとしています。

今回は特集、美しい大分、として美術の立場から、それぞれのジャンルの方々に書いていただきました。〃美しいおおいた〃は、そこに住む人たちの創造と開拓の精神から生まれたものだといわれています。地方の時代こそ豊かな「人間」でありたいものです。忙しい中、原稿をお寄せいただいた方々には、稿料も差上げられず心苦しく感じておりますが、芸術文化啓蒙への豊かな「心」に深くお礼申し上げます。　（T）

発行所・大分市府内町県教育庁文化課内県芸術文化振興会議事務局・印刷大分プリント社・題字野田南圃